

令和最初の最速王者決定！

第71回高崎高校マラソン大会

11月12日、第71回校内マラソン大会が行なわれた。825名が完走し、1位には34分54秒で野口魁斗君（1の3）が輝いた。また、4人の先生方も約9kmの戦いに挑んだ。中でも、井上貴志先生は生徒たちに引けを取らない走り、52位という結果を残した。そこで、2人にインタビューを行なった。

50位以内を目指していたという野口君は、「1位になれど思っていたいなかったの驚いている。授業で走った後半コースの上り坂がなかったの、リラックスして本番に臨めた。序盤で先頭集団に合流し、周りを気にせず自分のペースで走ろうと考えていた。それを実行できたことが結果に繋がったと思う。また、開会式での陸上競技部の方のアドバイスで、上り坂も乗り切れた」とレースを振り返った。

野口君はサッカー部に所属しており、自主練習は行なわなかったという。「部活動時に走り込みをした。授業では自分の走りを意識しながら走った。陸上競技部の友人と一緒に走り、走力を上げることがにも努めた」と話す。加えて、「3連覇を目指したい」と来年以降に向けて意気込んだ。現役時代と合わせて今回が10回目の参加となった井上貴志先生。インタビュ冒頭、「記念の年だから表彰してほ

しい」と笑顔で浮かべていた。高崎赴任1年目は150位だったというが、今年は52位で完走し自己ベストを更新した。「本当にギリギリの戦いでずっと苦しかった。だが、先輩として後輩には負けられないと思っ意地を見せた」と話した。毎日走るようになったのは校内マラソン大会だけが理由ではないようで、「30歳になって老け込むことが怖くなった。それに抗うために、自らの時間を削って走っている」と明かした。今大会については、「ここ数年に比べ、後尾で固まって走る生徒が少なかった」と評価し、「多くの生徒が一生懸命走っていて良かった。そんな生徒たちの姿を見て、今まで以上に良い授業をしていきたいと思った」と述べた。

最後に、「いつ転勤になるかわからないので、来年もラストイヤーのつもりで1位を目指す。参加予定の反町豊先生には絶対に負けない」と早くも闘志を燃やした。（宮内）



一斉にスタートする生徒たち



翠巒
Mini Press
第166号
2019/12/23

編集・発行
高崎高校新聞部

紙面紹介

- 〈表面〉
- ・マラソン大会
- ・修学旅行
- ・東北研修
- 〈裏面〉
- ・部活動の活躍
- ・弁当コンクール

2年 修学旅行

有意義な4日間に

修学旅行は、11月19日から22日の4日間、主に京都、大阪、広島で研修を行なった。1日目の広島では、原爆ドームや平和記念資料館、語り部の講話に心を打たれた様子の人が多く見られた。この旅行を支えた修学旅行委員長の加藤雄太郎君（2の7）に話を聞いた。

加藤君は、「修学旅行委員になったからには、委員長になろうと思ひ、立候補した。今回の旅行は、主体的に学ぶ機会を増やすということを目標にしていた。ワークシートで学習する時間を作り、楽しむだけでなく、知識がしっかりとつくようにした」と話した。

一方で、「生徒全員の希望に沿うことが難しく、班分けやクラス別研修で遠慮する人が出てしまった」と苦労したことを語った。

来年修学旅行に行く1年生へのアドバイスを聞くと、「姫路城がおすすめ。ガイド



加藤君おすすめの姫路城

さんの話を聞きながら城の特徴を知ることができたのは魅力的だった。班別の自由行動では、自分たちの行きたい場所に行くのが良いと思う」と話した。

最後に、「主体的に4日間学べて、有意義な旅行になった。学ぶ時は学び、遊ぶ時は遊ぶというメリハリもつけられた。時間厳守を徹底し、大きなトラブルも無く旅行を終えられた。学年の皆には感謝したい」と今回の修学旅行を振り返った。（齋藤）

1年 東北研修

今後の成長への土台に

1年生は11月19日から1泊2日でSSH科学リテラシー研修に参加した。各クラスで東北大学や被災地などそれぞれのコースを巡った。東北大学では文型、理型の希望別に分かれ、図書館や研究室などを見学した。また、文型は経済学部、理型は工学部の模擬講義を受講した。

さらに、東日本大震災の被災

害にあった南三陸町や石巻市を訪れ、語り部の話を聞くなどし、被災地の現状を学んだ。研修の企画を担当した菊地将史先生は、2日間の研修を「大学での模擬講義では、生徒全員が真剣に取り組んでいる。被災地見学でも真摯に被災地の現状を受け止めていた。たとえば、「生徒たちにもっ

と大学や仙台市の街並みなどを見てもらいたかった。しかし、日程が短いのにその多くを移動時間が占めていたので、滞在時間が短くなってしまった。そこは来年度の改善点だと思ふ」と振り返った。また、「被災地の現状を学ぶことで、当たり前前の日常が過ぎることの有難みを感じることができたと思うので、このことを忘れず、社会に貢献してほしい。そして、大学生生活や研究室を見学して高まったモチベーションを原動力にし、勉強を頑張ってもらいたい」と話した。（小池）

NOTE

先日公開された映画「STAR WARS」シリーズは言わずと知れた不朽の名作である。多くの人々を魅了したこの作品はまさにSF映画の金字塔と言えるだろう。現在全9作品が公開されているが、3作品ごとに制作時期が大きく異なるのも特徴である。操り人形のぎこちない動きだったキャラクターが、時を経てCG技術によって縦横無尽に動く姿は圧巻のものであったが、これを非難する声も少なからずあったという。映画自体の評価も他作品に比べて低い傾向にあり、多くの批判記事も見受けられた。変化には、リスクと反対票がつきものである。▼毎年多くの受験生が利用する大学入試センター試験に代わって、2020年度から導入される予定の大学入学共通テストも、反対票に悩まされている。▼英検などの民間試験の導入延期を皮切りに、メディアでは様々な問題点が取り上げられている。教育現場に大きな不安を招いた記述式の導入も、採点の公平性が疑われ足踏み状態である。高校生による共通テスト延期を求める署名活動も大々的に取り上げられて、最近では専ら延期ムードである。▼一定数の批判はあるものの、「STAR WARS」は映像技術の変化を利用し、壮大な世界観を演出することで今もなお多くの人々に感動を与えている。必ずしも変化がマイナスに繋がるとは限らない。一高校生として、批判的視点と公平な態度の両方を持ち合わせていきたいところである。（根岸）

吹奏楽部

金賞2つつ獲得

アンサンブル県大会出場



打楽器を演奏した部員

西部地区アンサンブルコンテストに出場した。部長の菅家太一君(2の1)は、「このアンサンブルコンテストは、各学校から3、8人の団体最大4組まで出場可能で、上位4組が県大会に出場できる。本校の吹奏楽部は、各アンサンブルで別々の活動をしてきたが、地区大会を勝ち抜いて県大会まで進みたいという共通の目標を持って練習してきた」とコンテスト前の活動を振り返った。

また、当日の様子について「地区大会ではあるが、どこの高校もたくさん練習した。また、当日の様子について、演奏のクオリティが高かった。1位と2位の点差も小さく、ハイレベルなコンテストだった」と話した。

結果は、金賞八重奏と、コントラバス・打楽器の四重奏が金賞で地区代表になった。木管八重奏は初心者の1年生が多いながらも銀賞で、木管五重奏は銅賞だった。この結果に、菅家君は「2つのアンサンブルが県大会に進めるのが嬉しい。テスト期間中も練習を頑張った甲斐があった。演奏会場と練習場では音の響き方が違うため、緊張して6割くらいの力しか出せなかった。ダメかなと思っていたので金賞だった時は驚きと嬉しさでいっぱいになった」と語った。

吹奏楽部は、12月1日にかぶら文化ホールで行なわれた今回の連載では、高生が多くが気になっているであろう山田敏行先生の学生時代について、話を聞いた。

「どんな生徒だったか。」

前橋高校でごく一般的な生徒だった。

一部活動は、

誰にも信じてもらえないが、小学校から続いていたラグビー部に入っていた。しかし、試合中に記憶の飛ぶような痛みを味わってから辛くなってしまい、退部した。その後、仲間たちと茶道部や園芸部を結成した。園

芸部では、校内でメロンや米の栽培をしていたが、体育の先生に食べられてしまう珍事件も起こった。

連載第5弾

山田先生の学生時代

一勉強については、

3年生の時は1日6時間勉強した。模試で全国の高い順位をとったことがある。

一高校卒業後は、

た時は、「ここは本当に日本なのか」と疑うような光景を目にしたことが何度かある。障がい者のグループホームで介助ボランティアをした時に

大学にはあまり行かなかったが、大学の外でたくさんのお会いをした。ホームレスの人たちへの支援を手伝っていた。

県大会を12月15日に控え、日々の練習に励んでいる。菅家君は「県大会で良い成績を残し、その次の西関東大会を目標に頑張りたい。ただ、吹奏楽は明確に勝ち負けが決まるものではないので、自分が満足できるように演奏していきたいと思う」と決意を語った。

は、「障がい者が生きづらい世の中だ」と気づかされた。この経験が自分の原点だと思う。また、学生の時に出会った品の良いおばさんや一流商社の社長夫人だった、ということがあった。その社長夫人に気に入られ、「うちの夫に就職の世話をお願いしようか?」とまで言ってくれたが、そもそも卒業に必要な単位が100以上残っていたため、断念したこともある。やはり色々な経験をしたい方が良いと思う。(鈴木)

お弁当甲子園 優秀賞受賞



今夏、鎌倉女子大学が開催した「お弁当甲子園」で、長井太優君(1の3)のお弁当が優秀賞に輝いた。そこで、長井君と家庭科担当の岡田典

おにぎりの担任と副担任が入ったお弁当

子先生に話を聞いた。

〈長井君〉

一受賞をした感想は、入賞するとは思っていなかったのに驚いた。クラスメイトからの期待に応えられて良かった。

一お弁当のテーマと理由は、「私」から「1年3組のみんな」へ個性あふれた!とおきの委員長弁当」というテーマだ。日頃からクラスの人に支えられているので、それに対しての感謝を伝えようと思った。

一受賞理由は何だと思えるか。表彰式で審査員から「クラス向けのテーマは斬新」と言

われた。人とは違った切り口にしたから受賞できたと思う。

一お弁当の一番のポイントは、担任の中嶋英彦先生と副担任の國富充敏先生の顔を海苔で表したおにぎりだ。忠実に再現できたと思う。

〈岡田典子先生〉

一長井君のお弁当の感想は、色合いに優れ、おにぎりにすぐ目が行った。表彰伝達の電話が掛かってきた時、真先に長井君だと思った。

一受賞するために必要なものは、テーマとお弁当の中身との整合性が受賞のカギだと思った。来年も1年生に応募を呼びかけたい。(五十嵐)

ぼうい『忘出ず』全国入賞 放送メディア研究部

放送メディア研究部が制作した映画、『忘出ず(ぼういず)』が、「NPO法人映画甲子園主催 高校生のためのeiga worldcup2019」自由部門でライジングスター賞を獲得した。同部は、初出



『忘出ず』について語る山田君

場ながら、入賞という快挙を成し遂げた。

一『忘出ず』は、夏の終わりの儚さを胸に秘めて過ごす男子2人の青春ストーリーだ。一番の見どころは彼らが花火をするシーンである」と脚本担当の儘田康平君(2の3)は作品内容を紹介した。

作品のタイトルについて、「『忘出ず』は、掛詞のようになっている。男子2人を表すboysと、夏休みの終わりを、忘れてしまった記憶を思

い出すことができるかどうかということを重ね合わせている」と話した。

撮影や編集時のことに関して、「撮影は夏休み中に始めたが、学校行事により、部員が集まらないこともあった。そのため、8月に撮ったシーンの続きを9月に撮影することもあった。また、1つ1つのシーンが間延びしないように、様々な方向から撮るようにした」など、裏話や工夫を口にした。

今回の結果を受けて山田君は、「今の2年生が獲得した初めての賞だったので嬉しい。審査員のコメントには、主演2人の滑舌が悪いなど厳しいものもあった。しかし、1年生の演技が高く評価されたことは良い収穫になった。今後は、翠巒祭で披露する動画の制作に、さらに力を入れたい」と抱負を語った。(茂木)